

夏は敷きわら、かん水

ナスはインドが原産地で、古くは奈良時代には中国から伝わったとされます。果皮の紫色はポリフェノール的一种であるアントシアニンという色素を含み、抗酸化活性が高く、疾病予防や老化防止に効果があるといわれています。味は淡泊ですが、漬物や煮物にするとしょうゆや調味料の味が染み込みやすく、みそとの相性が良いです。

生育適温は22～30度で、肥沃な土壌を好み、水かけのしやすい場所を選びます。

定植は、最初の花が咲くころが適期です。本ぼに1平方メートル当たり苦土石灰150グラム、堆肥3キログラム、化学肥料100グラム（窒素、リン酸、カリ各15%の場合）を目安として使用します。栽植密度は畝幅2メートル、株間は仕立て本数により異なりますが、3～4本仕立ての場合60～70センチとします。

定植後は仮支柱を立て、苗を固定します。株が伸びてきたら一番花の上下の脇芽を残し3～4本仕立てとし、下の脇芽はすべて摘み取ります。長さ2メートル程度の支柱を約2メートルおきに畝の両側に立て、両端は倒れないように補強します。各枝はひもを巻き付け左右に振り分け30～35センチ間隔になるように誘引します。

雌花は二葉おきに着生し果実を収穫しますが、さらに主枝や側枝から発生する次の側枝（脇芽）からも収穫します。**側枝の花が咲いたらその先の葉を一枚残して摘心**します。その下の脇芽は主枝に近い一つを残して他は摘除します。**果実が大きくなったら、収穫と同時に伸びてきた側枝の上で切り落とします。同様に側枝を切り返すことで秋まで長く収穫できます。**

追肥は、二番果の収穫が始まるころから2週間おきに施します（化学肥料1平方メートル当たり20グラム）。夏季の乾燥防止のために敷きわらをし、かん水に心がけましょう。株が大きくなるに従い通風、採光を良くするために、古葉などはこまめに除去します。しかし夏季の暑さと疲労で着色も悪くなったら、**8月上旬頃までに剪定更新**します。各枝を株元から半分程度の高さで切り詰めると、1カ月後には再び秋ナスを収穫できます。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室長）

